

佐伯史談

第一〇三号

「郷土史研究」誌
通算第一二九号

昭和五十年十一月十七日発行

佐伯史談会

事務局 佐伯市大字稻垣宮龍護寺羽柴方

追憶記

菅 一 郎 先 生

— 黒澤の桜と花晴潭 —

佐伯史談会
副会長 羽 柴 弘

久しくご静養なさっていた菅一郎先生は、去る九月二十五日、上野田下城のご自宅でのんびりと逝かれた。享年八十一歳であった。

ご葬儀は、翌々二十七日午後一時から、市内潮谷寺でいとも厳粛に執行され、多くの会葬者は偉大な先生の画業を追想し、まことに感銘ふかいものがあった。

もうそれから二か月以上経った。

率直にいうと、菅先生は佐伯における無形文化財で、変な言い方をすれば佐伯市の国宝であった。お若いころからのその画業は、かつてこれほど幅広く多くの作品を残し、息長く制作に励まれた画家は、佐伯にはなかつたのではあるまいか。今後よしんば先生の芸術にせまる人

が出る尺しても、先生の画家としての声価はいつまでも称揚され、その作品はいつまでも人々に愛好されるであらう。もう数年ご健在であつたら、佐伯市は名誉市民として推し、先生の芸術をたたえることになつたのではあるまいか。

先生はお年を召されているにもかかわらず、実に記憶のたしかな方であつた。

先生は城下町佐伯、内町の梅の家で生まれ、幼少のころから八十何年を佐伯で過ごしなされたので、総弊の佐伯人、明治大正年代の古いことは、何でもよく憶えておいであつた。

そこで私も佐伯史談会は、無難にほんも度々押しかけては先生にお話を伺っていた。そんな中から二つほど思い出すことを述べて、先生を

本号の内容

- 追憶 菅一郎先生（羽柴弘）……………一
- 所収 南郡佐伯市馬場について（高原節）……………三
- 本誌 豊後国大分郡葛束村の切庭丹……………九
- オルガンと追憶……………（安部先生節）
- 研究 大神性墓と海民佐伯是基（佐野貴）……………三
- 著書 吉州佐伯村の文書（佐野徳彦）……………三
- 追想 龍溪安野文雄先生の郷郷……………三
- 研究 わかふるさと「元田記」（菅野廣仁）……………三
- 著書 九州地民俗藝大会の出場して……………三
- 研究 私の姓氏考（深谷格夫）……………三
- 研究 傳書に見る「肥後地」……………三
- 研究 佐伯戸の法にはまゆらぎ……………三
- 研究 受賞履歴……………三

読んでみたいと思う。

堅田の輿、黒沢の東光庵の桜の話が出たことがある。鶴谷学館の教師であった岡木田独歩を排斥したと疑われたことのある石丸敏一が、歴史唱歌をつくり、その中で

過ぬる西南戦争に 野津將軍が駒つなぐ
桜の名所黒沢も いざや一渡はゆきて見ん

というのを菅先生は話し出し、その誤っているところを話題にしたことがあった。私は佐伯のあちこちを歌いあげているという、その全文がほしかつた。

ところが程なく大分の立川輝信先生(故人)から、図らずもその石丸敏一作の「郷土唱歌」と題する小冊子を買った。早速それを見ると黒沢の桜は、

花は桜木人は武士 そのもののふの名をさしるす
桜の名所黒沢は 谷の河鹿の声もよし

となつてゐる。このことを菅先生に伝えると、「いや左しかにそれはあつた、思い出して見よう」と言うことで、何日かの後、前にかかげた黒沢の桜を含む前後数節を、便箋に何枚か独特の文字で書いて下さつた。私はすぐその全文をとして簡単に表紙をつけ、今も持っている。

それから一年ほどたつた後、戸宍の保田家に行つた時、はからずも明治、大正時代の教科書に交つて、大分の甲斐書店発行の「大分県地謡唱歌」(鶴谷成均(作曲)が見つかつた。それであつた。殆んどその通りに先生は思い出して書かれたわけであつた。

これらについては、余談がいくらもあるがここでは省くとして、今一つ――。

中島子玉に「龍川舟遊八首の詩があり、数年前この佐伯史談誌上に私が紹介したことがある。それが子玉の自

筆で、清人花晴潭が絵をそえておる――と何の本かに書かれてゐる。それがたまたま話題になつた時、それは誤りで花井惟陳という佐伯の人、墓は養賢寺の裏山墓地にあることを話された。

何日かたつた後、残暑がきびしかつた頃であつたが、先生から「連絡の電話を頂いたので、高木・加藤・私の三人が養賢寺で待ち受け、先生のご案内で墓を訪れた。あつた、あつた。ごく簡素なものであつた。

正面に「晴潭 品惟陳墓」とあり、左側面に「行年二十八才、俗名花井三代吉」、右側面に「文政七年甲申九月廿七日」と、文字はきわめてはつきりと読めた。やはり同じ絵の道である。このようなことは菅先生でなければ教えてはいただけない。

その年の秋の暮、私は上京の機会があり、世田谷区岩谷の中島家を訪れた。先ごろなくなられた中島祐吉氏がご健在で、私と案内した阿部克己氏共々歓迎され、中島子玉の遺墨・詩稿と共に、思いがけず「龍川舟遊」の絵巻の現物を見ることが出来た。もう夕方であつたが私は主人に乞うて、大急ぎで写真に収めた。

東京から帰って写したその絵巻を、拡大鏡片手に読んで、その巻頭に子玉自筆の序文があり、その中に「花晴潭ヲシテ四ニ造ラシム云々」のことで、「晴潭名ハ惟陳、子尚之元」であると言つてある。

この絵巻の出来たのは文政五年、時に子玉は二十三才、惟陳は墓石にあるように文政七年二十八才の没年であるからこの絵巻は二十六才の時である。

このように、菅先生は何かにつけて私たちを導いて下さつた。これに従つて私たちが調査や研究活動は展開して、次々と「佐伯史談」誌上に発表されて来た。

なお、しかし先生はすでに亡い。(おあり)